

日常会話にみられる類像化作用

—自己の否定的側面に関するスタンス表出の語りから—

合崎 京子(立教大学/日本学術振興会)

1. はじめに

本研究は、他者と共有し難い経験を持つ人が、日常会話で自己の否定的な経験を語るときの形式に注目し、その中で「類像化作用 (iconization)」(Silverstein, 1993) がどのように機能しているか、考察を行うものである。我々のコミュニケーションを取り囲むコンテキストは無限にあるものの、実際日常会話を解釈するために参照するコンテキストにはある程度まとまりやつながりがあり、そのまとまりやつながりを生み出している原理が類像化作用であると言われている(小山, 2008)。その形式の代表例が反復であるが、言語や非言語行為の反復を用いることによって、出来事が起こっている「今ここ」の場に近接していない不在の事物やコンテキストをも指示しうる (ibid.)。この作用は「詩的機能 (poetic function)」(Jakobson, 1960) とほぼ同義であることから示唆されたとおり、詩などの韻文に顕著であるが、日常会話においても、会話分析の隣接ペア概念¹のように、会話の社会行為的な性格の形成に寄与する効果がある。本研究では、語り手が会話で自らの否定的側面及び、その側面に対峙する自らのスタンスをいかに他者に表現するか、その描写をとおり、そこに立ち現れる日常会話上の類像化作用について分析を行う。

2. 事例分析

分析対象とするのは、3人の異なる初対面の定型発達者に、自閉症スペクトラムを持つ成人(以下、ASD者)のCが幼少期の辛い経験を語る場面である。自閉症スペクトラムの症状は先天的なものであるが、知的遅れのない成人が症状当事者であった場合、直截的には可視化されにくく、家族であってもその症状特性の理解に支障をきたすことがままある。以上から示唆されたとおり、ASD者が、自身の属性や社会的背景に関する情報をほとんど共有しない初対面の相手に、その症状及び症状に対峙する自らのスタンスを描写することは容易ではない。

本発表では、ASD者が自らの症状特性を描写した箇所の音韻、イントネーション、語彙といった言語・パラ言語に焦点を当て、①詩的機能の特徴である反復構造、②i)過去の自己感情の述定とii)現在のそれについての述定、i)とii)との間にみられる対照ペア²、そして③各々の語りで用いられた引用形式、以上に着目し日常会話においてCが自己特性に対する自らのスタンスを呈示する際、いかに類像化作用が機能しているか分析を行った。尚、行頭の数字は各会話全体をとおり、1から振った番号である。

2.1 社会文化的に流布したフレーズを利用した反復構造

1回目の収録会話は、同じ就労支援作業所に通所するものの面識はほぼないT(男性)との会話である³。以下で両者は「会社の上司や同僚に対する不満」についてのやりとりを交わしている。以下、すべての断片においてトランスクリプト赤字箇所が、分析対象とする、Cによる自己の生きづらさについての語りの部分である。

<断片1>

119 C: あの誰かできないこととか困ったこととかあってくも、それ(.)をそのあい(.)てに責任を転嫁するというか、こう:(1.5)
そういうことがちょっとく↑がで:えなんですくなの[でちょっと悪口というのは、ちょっとあまり
あの(.)いえ!といいわれてちょ-ちょっとすぐ出てこないんです。(0.7)

120 T: はい=

121 C: =>はいすいませんはいく(hhhh)(鼻息)

122 T: (.)うん責任感が強いんですね

123 C: せ↑きにん感が強い、う:んそう、mいう言い方もあるのかもしれないです>けれどもく、
: なんか#-こうとにかくあの:たとえて言うとの

⇒124 >電信柱が高いのも 郵便ポストが赤いのも
みんな私が悪いと。 <そう[.]いう刷り込みを受けているので(0.6)

125 C: あの(1.0) <(s)たぶんあの(0.8) ↑定型の発達の人だったら:い[なに-なにかそこで]そ-そ-そ>外の世界に:影響を受けて:い、
: 別にその:みんな私が悪いというわけではないと。いう風な(.)°この°考えに修正がしやすかったと思うんですが

126 T: (.) (咳をする)はい=

127 C: =その:発達に障害があるので:あの:、<そう(.)いう思い込みからどうものがれられない>ところがくある、え:>あり↑ますく(0.6)

128 T: う:ん

129 C: はい↑

¹ 隣接ペアとは、例えば「挨拶-挨拶」といった定型・同型の反復である。

² 対照ペアとは、例えば「昔々あるところにおじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました」といった文章における、「おじいさん/おばあさん」や「山/川」、「芝刈り/洗濯」などの対照関係、すなわち排他的対立を特徴とするペアのことである。

³ 1回目の収録は2013年11月に行った。

130 T: ()う:ん
131 C: はい
: (nhhhhh) (4.0)
132 T: う:ん
133 C: はい

⇒ 134 T: **まあ二次障害という**か <Cのスタンスに対する理解>
135 C: [二次障害的なはいとこです

ここでCが用いた「電信柱が高いのも郵便ポストが赤いのもみんな私が悪い」というフレーズは落語家である4代目柳亭痴楽の「綴り方狂室」という落語の都々逸(どどいつ)が元ネタだと思われ、その後も企業の不祥事における責任者の謝罪会見や、テレビのお笑いのネタなど様々な場面で使用される一節である。

このフレーズの反復構造をみていくと、「電信柱」という普通名詞に続き、主格を示す助詞の「が」、そして形容詞「高い」と、取り立て詞の「のも」という連なりが確認できるが、この文法構造は続く「郵便ポストが赤いのも」でも同じ形態を成しており、(文法的に)同一形式の節が繰り返されている。後半部分では、前半のくだりの名詞及び形容詞は他の語彙に置換されているものの、助詞部分においては同一の語彙が用いられており、各節間の形式にも繰り返しがみられる。音韻面に目を向けると、同一助詞が用いられていることに加え、「い」で終わる形容詞の反復されることにより脚韻が複数回踏まれている。加えてパラ言語的にもこの語り部分のみ、前後の発話よりも速度が上がっており、言い淀みの多いCの発話の中で、より明瞭な輪郭を持つものとなっていることがうかがえる。

1回目の会話から約5か月後、Cと大学院生M(女性)との会話収録を行った。以下でCは、自らの幼少期には発達障害の認知度が低かったため、自分の特性に対する周囲の理解が得られなかったことを話している。

<断片2-1>

372 C: はい知見-知能の低い子にしか、出ないものとされてい↑た::の::で::、, とういうしょ-あの::明らかに発達障害だろっていう症状, があつて↑もそれをス↑ル-されて::え::いたんです。

373 M: あ::ほんとに

374 C: はい, ↑で, まあそのすごいそのこた<くだわりが強い>であるとかそのそう↑ったことは全部↑わがままという言葉で処理をされて: (0.9)

⇒ 375 C: **なんでしょうこう::す-あの::すごいこう::抑圧的↑か:あの::自罰内罰的↑か, あのと↑にかくその私がわがまま私みんな悪いので::あの::私が↑我慢をすればそれで済むん-あの::>それであの::<まああの場が↑済むんだと, ↑いうような::>育ち方をしました<**

376 M: °なるほど°

377 C: はい

378 M: 結構(0.7)つらいというか

379 C: ま↑そう, ですね::

380 M: (・・・) ですよ

381 C: あはい, その::, 何もかもこの世の全ての(こと)は自分が悪いと, 思っていたとき↑は::, まあ, つら()かっ()たようなえ::記憶↑>があります<

382 M: ° **あそうなんです**ね <Cのスタンスに対する共感>

375行目からのCの語りは、その前に述べた、幼少期に周囲から自分の生得的特性について理解を得られなかったことに対する具体的説明である。この語りで選択された語彙をみてみると、冒頭では「こう」という、言葉で描写し難い事柄の代替表現の繰り返しが起きている。本題に入る以前の前置き部分上でのこのような語り難さを示す語の反復により、これから語られる内容が深刻なものであることが強調され、ここまでの話題とは一線を画したものであることが前景化される。これに続いて本題が語られるのであるが、ここで選択された一連の語彙は「くだわりの強さ/抑圧的/自罰内罰的/わがまま」といういずれも否定的様態表現である。否定的な言及指示的意味を持つ語彙が4回も連なることによって、語彙間に結束性・一貫性が伴うこととなり、それぞれの語彙が持つ言及指示的意味以上の悲壮感が創出されている。

次に「私が」というC自身を指す一人称代名詞が3回反復される。こういった省略可能な代名詞が繰り返されることによって、「私」という代名詞が指し示す人物、すなわちCが、その前に語った否定的様態の根幹となる人物であることがより鮮明になる。このようなCの自虐的自己認識は「それで済む」という自分が責めを負うことで物事が円滑に進むさまを表す語彙が反復されることによって、一層際立ちをみせる。

また、前の断片同様、音韻的にも「~的」という接尾辞や、接続詞のように用いられている「というか」「抑圧, 自罰, 内罰」という脚韻を踏んでいることに注意されたい。この脚韻の踏みには(破裂音の強い)子音が連なっており、聴覚的な反復効果においてもこの語りの印象を強化していることが示唆される。

<断片2-2>

(断片2-1の後, Cの幼少期の否定的な自己感情を語る。その中で話題の中で徐々に現在の心境に触れる言葉が出始めた場面が以下である)

461 M: ↑今は何か変わりましたか?

462 C: ↑え: (0.5) ま↑さっき言ったようにま考え方を変えるようにしたの↑で:

463 M: はい

464 C: その:: (2.0)

⇒ 465 C: **私<その::> ごはん, を求めるのも::あの, ↑呼吸をするのも, あの:: ↑排泄物を出すのも:: あのとみんな私が生きているせいで私が悪く, と↑いう考え方をやめ↑て: あ私のせいではないの↑で: あの:あまり↑気にならないようにしようと.**

466 M: うん

467 C: うん、それはまああの、私を作った人(たち)の責任↑である、というふうに、あの::考えるようにしたの↑で、↑まあ、そういうところではまあ気が、楽というか、↑あまりこう何もかもあの責任を->自分に求めないようになりました。

468 M: ↑するとやっぱり周りの人との関係なんかかわりますか? (0.6)

469 C: ↑そうです↑ね:

断片 2-1 では、自らの自虐的局面を述定していたCであるが、やりとりの最後では「辛かったような記憶がある」と述べ、今・この自分は、自虐的感情を過去のものとして捉えていることもほのめかす。それに続けて現在の心境を語るのが上の断片 2-2 である。この語り冒頭の文法構造に目を向けると<名詞+を>+<動詞+の>の反復が3回続く。助詞「の」の繰り返しによって並列構造を形成する形式は、前の2つの語りと断片と類似している。また、ここでも前断片同様、省略可能な「私が」という一人称代名詞と、主格を示す助詞の「が」を反復し、次に来る語彙の責任主体が自らにあることを強調した上で「みんな私が悪い」を後述しており、この形式もまた、全断片の語りの形式を繰り返しであることがうかがえる。加えてあらゆる世の中の否定的事象の要素を立て続けに並置するさまは「私が悪い」ことに該当する事態の多さを暗示、森羅万象、世の中のあらゆることは自分のせいであるという認識を前面に押ししており、以上の点において前断片の構造を、(談話という単位の時空を超越し)反復していると言えるだろう。

だが、これまでの断片では、自虐的表現で完結していたにも関わらず、本断片はそれにとどまっていなかったことに注目したい。続けてCは、「という考え方をやめて」と、それまで述べてきた心情が今とは異なることを呈示したうえで、話題展開の切り替えを図り、(一人称代名詞の「私」を使用しているものの)今度は責任の所在は自分がないことを「せいではない」と過去の心情と異なるものであることも併せて明示しているのである。これらを踏まえ、以下の3回目の収録断片をみてみたい。

3回目の収録会話は2回目の収録と同日に行った。対話者Kは社会人1年目の女性である。以下は両者ともに人付き合いが苦手であるという認識を共有したあと、その苦手さがどのようなものであるかを、CがKに語る場面である。

<断片3>

267 C: で今はその:: ↑人:(0.3) 付き合いが苦手であるという事実を踏まえ↑て、まひと-ひ-他の人と、コミュニケーションを、とるように、え:: なりました。

268 K: あ:: (1.1) あじゃそれ↑は: まだちょ-ちょっとはこう心が落ち着いたらって言えるのかもしれない

269 C: ↑そう、ですねはい。

270 K: うん(1.4)

271 C: それた-たとえて言う: あ:: (1.9) う::ん(.) た-↑たとえとしてはあまりよくないと思うんですが:

⇒272 C: たとえは足と手がない(0.4) ことに: 気づかなく↑て:

↑なんで私は早く走れないんだろう:: ↑あれが掴めないんだろう::、みたいなことをずっと:(0.3) 思ってい↑て:

↑で大人になってその原因↑がその: 物理的にないもののせいだと、いう: ことに↑気がついて::

んで、その:: (1.2) 車いすに乗ろうとか、ま義手、や義足を使おうとか、なっているようなそういう感じです。

273 K: ↑あ:(1.2)

274 C: hs-そう、多分て-手足がないよりはnみ↑耳が聞こえない人、でたとえの方がよりわかりやすいかな: と、え:: 思います

⇒275 K: じゃその自分がちょっと苦手だったもの↑をい、なんだ、ちょっとこう別のもので補っていく【とか <Cのスタンスに対する理解>

276 C:

[↑あはい、そう、そういう感じですよ。]

断片 2-2 では、語られる内容の後半部分に変化がみられた。だがやはり(断片 2-2 の)会話直後に収録したこの会話でも、前半では否定的なCの幼少期の心情は変わらず語られ続けた。具体的には、これまでの語りと同じく、否定的要素を繰り返し(「走れないんだろう」、「掴めないんだろう」)、それらが自分に起因することを(この断片では反復こそないものの)一人称代名詞で呈示している。だが、後半では、断片 2-2 と同様、過去の心境と現在の自分との差異化を図る、といった内容に変化している。そのことは「(それ)で大人になって」という時制の転移を明示的に示していることに裏付けられる。これ以降の語りでは<手足が不自由な人が用いる道具+~しよう>という形式が反復されているのだが、ここで注目したいのは、今の心境についての述定においては「何らかの試みを実行しよう」という前向きな表現の繰り返しに置き換えられており、断片 1 とは異なった語りの様相へと変化がみられる点である。

2.2 対照ペアに具現化するあのとき・あの場所 vs. 今・ここ

ここまでCの語りで反復構造がどのように用いられているかみてきた。特に2回目の会話までは、否定的様態を示す語彙の連鎖、そしてそれらの帰属するものがC自身であることを明瞭に指し示す形式が、繰り返し産出されていた。だが、2回目の後半の断片以降、その構造を一定程度保ちつつも、それに付与するかたちで、Cの現在の心境までをものが語られている。このような過去の自分の心境に対する語り、現在の自分の心境の語りとの間にどのような関係性がみられるか、本節でより詳しく述べていく。

今一度、断片 2-1 を想起されたい。この断片のCの語りの前半、幼少期の自分の心情を語る箇所Cは「(私が)悪い」という自己責任を追及する語彙を選択していた。一方後半では「(私の)せいではない」という、自己責任の放棄を示す語彙を使用している。つまり、両者の言及指示的意味は<悪い vs. せいではない>という対照ペアを成している。さらに

この対照性がより明瞭になるのが、断片3である。ここでは、幼少期の感情を語る上で、ほとんどの人々に生得的に備わっている「手・足」が不自由であったことを比喩的に語っているが、後半部、今の心情についての語りでは「義手・義足」という人工物に置き換わっている。ここには<生得的 vs. 人工的>という対照ペアが浮かび上がる。また、過去のCの心境は、「なぜ自分にはできないのか」という悲観を如実に示すものであったが、<今>の自分の心境を語る場面では「～しよう」という前向きな表現が使用されており、<否定的 vs. 前向き>という対照ペアもみられる。以上に述べてきた各対照ペアからは、Cの過去のスタンスと現在のスタンスとの間の対照ペア、すなわちC自らの、生きづらさに対する<過去>のスタンスが否定的であった一方、<現在>のスタンスは（できないことは認めながらも）前向きなスタンスになっているという、<過去 vs. 現在>のスタンス間における対照ペアまでをもが明瞭に浮かび上がるのである。

2.3 「引用」類像構造の変容にみられるCのスタンス

ここで、Cが各会話で用いていた引用表現に注目したい。断片1でCは、世間に流布し、一般的に耳馴染みのあるフレーズを「生きづらさ」を表現するために利用していた。Bakhtin (1981) は、(自分の発話) 自分の所属するコミュニティの過去の他者がその文化の中で口にした言葉の繰り返しであるというマクロレベルの「引用」を論じたが、この断片におけるCの語りはこの思想が具現化されたものとも言えるだろう。一方、今回取り上げた事例会話内という、よりミクロなレベルにおける引用については以下のことが指摘できる。断片1の「刷り込みを受けているので」、断片2-1の「このような育ち方をした」という表現からは（その前に述べたことが）<自分以外の他者（おそらく保護者）>による発話・行為の引用であったことを示している。さらに断片2-2の「という考え方をやめて」、断片3の「思っている」は、<過去の自らの声>の引用であり、過去のCという、現在とは別人格を持った他者の言葉であることを明示している。こういった言葉による呈示以外にも、引用箇所の開始部・終結部では若干のポーズが入ったり、引用部の発話速度が速くなったりしており、以上のようなパラ言語的な側面も、これらの引用部分とその前後の発話との差異化に貢献している。こういった引用も含め、上述してきた反復、対照ペアによる類像化作用が、Cの、過去の自分のスタンスと、現在のそれと明確に分けることに貢献したことは、後述するやりとりで3人の対話者いずれもが、Cの生きづらさについて一定の理解を示していること（トランスクリプト内緑字部分）にも示唆される。

3. 考察

本研究で取り上げたASD者は、自己の否定的な経験を語る際、1回目の会話では、自らの生きる社会文化に根付いたフレーズをほぼそのまま引用する形で、自らの症状に対する過去のスタンスを示していた。また2回目、3回目以降の語りにおいても、初回の語りの脚韻などの音の反復や句の反復などと、部分的に同様の形式を用いており、以上からは、1回の会話という単位を超越した、複数の会話にまたがる形式的類像性も観察された。さらに、この会話収録語、各対話者にフォローアップインタビューを行ったが、そのコメント⁴において（当該のCの語りの部分に）それまでの会話とは異なった独特の雰囲気を感じていたことを示唆する内容が述べられたことから、他の会話場面からこの語りを引き立たせる異化作用も働いている可能性も認められた。本研究からは、Cが意識的・無意識的に用いた類像化作用は、初対面の他者にも社会文化的に認知可能なスタンスを示すことを可能にしていることが示唆される。加えてこの類像化作用は「今・ここ」の自分と「あのとき・あの場所」の自分のスタンスの差異を鮮明に浮かび上がらせることにも寄与していることにも留意されたい。

本研究で取り上げたCの会話は研究者がデータ収録した少数の会話でしかないが、これらの語りからは、類像化作用が言語化しにくい事象に対する話者のスタンスを示すことに、また聞き手の理解を促進することに貢献していることが考察される。

謝辞：本研究はJSPS KAKENHI Grant Number 18J12417の助成を受けて行われました。心より御礼申し上げます。

4. 参考文献

- Bakhtin, M. M (1981). Discourse in the Novel. In M. Holquist (Ed.), *The dialogic imagination* (pp. 259-422). Austin, TX: University of Texas Press.
- Jakobson, R. (1960). Linguistics and poetics. In T. A. Sebeok (Ed.), *Style in language*, (pp. 350-377). Cambridge, MA: MIT Press.
- 小山亘 (2008). 『記号の系譜：社会記号論系言語人類学の射程』三元社。
- Silverstein, M. (1993). Metapragmatic discourse and metapragmatic function. In J. A. Lucy (Ed.), *Reflexive language: Reported speech and metapragmatics*, (pp. 33-58). Cambridge, UK: Cambridge University press.

連絡先：aizaki@rikkyo.ac.jp

⁴ 紙幅の都合上、インタビューの詳細は割愛するが、一例としてはMが「フォローアップインタビューで対話者たちが「他のやりとりと(C)のモードが違うことを感じた」と述べたことが挙げられる。